

特集 光陵卒の先生方が語る光陵生の”今”と”昔”（完全版）

光陵にある木が育ってる！

- 今と昔の光陵で、ここが変わったなあ…と思われることは何でしょうか？
- 茅野： 卒業して久しぶりに校舎に来てみたけれど、木が育ってるよね。
- そうですね、もう桁も違いますね。
- 茅野： ……「期」ではなく、「木」ね。樹木のほう（一同笑い）！ 僕らの卒業アルバムには立派な木は写ってないですよ。自分の卒業アルバムに写っているのを比べてみると、「この木はこんなに大きくなったんだ…」と感じます。
- 茅野先生は 7 期ですから、ご卒業されて 40 年近く経っていらっしゃいますね。
- 茅野： そうですね。40 年という月日の長さを感じますね。
- テニスコートの裏の木も大きくなっていますよね。
- 茅野： 僕らの頃はテニスコートなんてありませんでした。今のグラウンドの隣にあるテニスコートのあたりも当時は土手でしたので、ボールが落ちて行ったりすると取りに行くのに苦労しました。あと、権太坂小学校も当時はありませんでした。
- 大竹： あー、なかったですね。僕のとくに権太坂小学校は造られはじめましたよ。
- 大竹先生は 10 期でしたね。
- 大竹： そうそう。当時、私は出版委員だったので、教育委員会まで取材に行って記事にしたのを覚えています。今でもその記事は残っていると思うよ。
- それは興味深いですね、ぜひ拝見したいものです。他に光陵高校の周辺はどのように変化しているのでしょうか。
- 茅野： 権太坂のバス停からのぼってくる道も今ほどきれいではありませんでしたね。
- 大竹： 歩道橋はありましたよね。でも、やっぱり立派ではなくて、もうちょっと安っぽかったと思います。通路がもっと狭かった気がしますね。
- 茅野： 首都高と横浜横須賀道路の陸橋も僕らが生徒のときにできたものです。途中まで地続きだったんですよ。
- 大竹： ああ、そうだったんですね。（一同笑い）
- 茅野： そうそう。それから道が拓かれていって、道路ができて、橋ができて…
- 大竹： 当時はまだ道も途中まででしたもんね。

文化祭の後の「デカンショ踊り」

- 光陵高校といえば行事が盛んという印象がありますが、特に思い出に残っている行事はありますか？
- 大竹： 文化祭は、デカンショ踊りがありましたね。後夜祭でキャンプファイヤーとフォークダンス、あとカラオケ大会があって、その後に自然とデカンショ踊りがはじまるんです。「デカンショ デカンショで半年暮らす、あとの半年は寝て暮らす」と言いながら、輪になって踊るんですよ。けれど、ちゃんとしていない人間はやっちゃダメなんだと言って反対して、強引にやめさせようとし

ていたのを覚えています(笑)。

笠原： ところで事務局の2人はデカンショってなんだかわかる？

— いえ、わかりません。何かの略でしょうか？

大竹： デカルト、カント、ショーペンハウエルの略でデカンショ。

笠原： 哲学者のことね。

— 当時からかなり活気があったんですね。文化祭は今と比べてどうでしょうか？

大竹： 今はミスコンをやっていますよね。当時は、「ファイヤーガール」というのを選んでいました。後夜祭のキャンプファイヤーの火を点ける女の子を選ぶんです。僕ときは華のある「遅刻の女王」が選ばれました。

— キャンプファイヤーですか！ロマンチックですね。グラウンドでやっていたんですか？火を点けた後はどのようなことをされていたんでしょう？

大竹： 火を点けた後はカラオケを歌ったりしていましたね。場所はグラウンドですよ。当時、ちょっとはしゃぎすぎってしまったことがあって、先生から呼び出されてしまいました。教師になった今だからわかりますが、あれは「特別指導」というものでしたね(笑)

茅野： 僕らのときは体育館でやっていたので、キャンドルファイヤーでした。木の枝のようなものを作って、そこにロウソクを立てて灯をとますんです。でも、そうこうしている間にやっぱりデカンショ踊りがはじまるんですよ。ジェンカを崩しながらデカンショを踊るという…もう気が狂うんじゃないかというくらい踊っていました。ずっと踊っているものだから、みんな汗だくなんです。さすがに先生も止めようとするんだけど、なかなか終わらず、先生たちも慌ただしくなったりして…

大竹： デカンショ踊りって誰がはじめたんだろうね？

茅野： まったく覚えてないんだよね。たぶん、6期じゃないかと思うんだけど。

大竹： 僕らのときに上の先輩たちが来ていたんだ。先輩たちが「本当のデカンショ踊りを教えてやる」と言って、教室の机をどかして踊らせるんだよ。ラインダンスのように足をあげて踊るんだけど、さすがに10分もやるとヘトヘトになるんだ。楽しいんだけど、こんなに激しいものだったんだって…

— 聞いているだけで太ももがつりそうです…

学音祭は12月、体育祭では仮装行列をした！

— その他の行事はいかがでしたか？

大竹： 学音祭は今のようには2月ではなくて、12月あたりにやっていたね。3年生は聴くだけでした。

笠原： 3年生って自由参加じゃありませんでした？

大竹： いや、僕ときは聴くだけだったんですよ。そこで、僕たちのクラスが「出たい、出させろ！」って実行委員会に直訴しに行ったんですよ。

— 大竹先生のクラスだけでですか？

大竹： そうそう。うちのクラスだけでした。聴いているだけじゃつまらないから出ようと言ってね。すごく強引だったけれど。曲も課題曲とかではなく、当時流行っていた「ステージ101」という番組でよく放送されていた「怪獣のバラード」と「涙をこえて」を歌いましたよ。

笠原： そうだったんですね。15期のときはやはり12月でした。3年生は聴きにくるだけでも良かったし、参加しても良いことになっていました。合唱部と隣の37HRが参加することを決めていたので、私は歌が好きだったこともあり、それぞれのゲストとクリスマスソングを歌う「3年有志

の会」の3団体に出ました。

— すごいですね。大竹先生たちが3年生の参加の突破口を切り開いて、笠原先生のとときには有志が出るまでになったのですね。ところで、体育祭は昔も5月にやられていたんですか？

大竹： 僕のとときは体育祭と文化祭は9月に集中してあったんだよね。

— それではとても忙しかったでしょうね。

大竹： 忙しかったとは思うんだけど、夏休みもあったしね。それに当時の体育祭は2週間程度の練習だけだったし、今のような応援団のマスゲームもなかったしね。

— そうだったんですか。確かに応援練習もなければ、生徒の準備もあまりないですね。

大竹： 純粋な体育祭だったよ。走って、跳んで…

茅野： でも、仮装行列ってやってなかった？

大竹： どうだったんでしょう。パン食い競争みたいなものはあったのを覚えています。障害物競走もやっていましたね。ああ、仮装していたかも…

茅野： 僕が1年生のときは、仮装行列なんてしていなかったんだけど、2年生のときからはじまったんですよ。うちのクラスは「裸の王様」でしたね。

— えー！本当に裸だったんですか？

茅野： さすがに真っ裸ではなかったですけど(笑)神輿みたいなものに、横浜学園の校長を裸にして乗せていましたね。

笠原： 13期の教頭はシンデレラやったって言っていましたよ。

— シンデレラですか！仮装行列というのも面白そうですね。

教師として戻ってきて気づいたこと…

— 生徒についてはどうでしょうか。当時との違いなど、何か気づかれたことはありますか？

笠原： 教師として光陵に来て最初に驚いたのはやっぱり女子の制服ですね。私たちの頃はジャンパースカートだったのが、上下が分かれています。赴任当時、私はまだジャンパースカートだと思っていたのですが、ミニスカートにしている生徒がいて、どうやって短くしているのか気になったんです。実際に生徒に聞いてみたところ、「折っている」と言われてしまい、「どうやって…」と戸惑いましたね(笑)長くいらっしゃる先生に聞いてみたところ、どこかの代から生徒たちが切るようになったと聞きました。どうせみんな切ってしまうならば…と、時代の流れに教師が屈した感じですね(笑)でも、制服会社さんでは今でもジャンパースカートのモデルも作られているそうですね。

— 今はもう誰も買ってないですね。私たちも見たことがありません…

笠原： そうですよ(笑)

— 他に気づかれたことはありましたか？

笠原： 運動部が盛んになったと思います。私自身も記憶が定かではなかったのが当時の雑誌光陵で調べたんですけど、19期生の子の投稿の中に、「光陵で驚いたことといえば部活動だ。まったく不活発なのが多いと思う。大体、一生懸命にがむしゃらにやろうとすると、冷たい目で見られている気がする…」とありました。

— 今の光陵と雰囲気が違うように感じますね。部活に入る生徒も少なかったのでしょうか。

笠原： 部活に入っていた人は約70%というデータがありました。そのうち運動部は約40%程度で、文化部のほうが盛んでしたね。科学部なんて50名を超えることもあったみたいです。

— 今では考えられないですね！

- 笠原： My 白衣を着て、「マイコンが暴走した！」と騒いでいましたね。当時は運動部で青春している感じの人は少なかったと思います。なので、光陵に赴任してきて、当時とはまったく違う高校になったな、と思ったりもしますね。
- 大竹： 確かにそんなに部活動が盛んな高校ではなかったよね。やってはいたけれど、勉強のほうに優先だったかもしれない。僕の代はいなかったけれど、前後では東大にも10人ほど合格していたしね。
- 東大に10人も合格していたんですね…すごい。
- 大竹： 重複もあるけれど、早慶も100人くらい合格者がいましたね。医学部も毎年10名は合格していたと思います。妻も光陵生ですが、妻のクラスでは医学部が3人もいたと聞いています。
- 笠原： もっといたかもしれません。3組では医学部が10人くらい。15期は東大が18人くらいいたと思います。科学部で白衣を着ていた子たちは半分くらい医者になったんじゃないかしら。
- 大竹： そうか。当時、勉強するのは当たり前として、部活動をしていたからかもね。一生懸命だったと思いますよ。
- 茅野： 僕はサッカー部でした。弱かったけれど、練習も毎日やっていましたね。
- 林： 僕はハンドボール部でした。今は女子部もできていますが、当時は男子部しかありませんでしたね。
- 笠原： 昔は女子生徒自体が少なかったですしね。
- 大竹： そうだね。クラスのほとんどが2:1で男子が多かった。15期は9クラスだったよね？教室も足りなくてね。1クラスだけ会議室で、扉がドアだったとか？
- 笠原： そうですね、1組がどこにあるか見つからなくて、友人に「ここだよー。」と言われ、「えーー！！」と…(笑)
- 会議室が教室だったなんて…それは驚きますね！

「陰即」してました？

- 以前はあまり部活動が盛んでなかったとのことでしたが、放課後はどんな様子でしたか？
- 笠原： 私の頃は、帰りのホームルームが終わった瞬間に教室を出ていく人が多かったですね。そのままバス停に直行して予備校に行く人たちが多く、「陰即(いんそく)」と呼ばれていました。これは「陰陰即帰り」の略で、当時の雑誌光陵にはこの「陰即」について1ページもの記事になっていましたよ。
- 当時は共通語となっていたんですね。
- 大竹： その雑誌光陵って何号？
- 笠原： 15号ですね。私は15期なので、その頃のだと思いますよ。
- 大竹： 陰陰即帰りって僕たちの代も使っていたかも。陰即とは言わなかったけれど…
- 笠原： 何年か経って略されたのかもしれませんがね。でも、生徒総会の時は困りました。当時の生徒総会は放課後にしか開けなかったの、陰即されてしまうと定足数が足りずに流会となってしまい、体育祭が中止になりかけたこともありました。生徒会のお手伝いをしたことがあったのですが、生徒総会の日「帰らないでください！」と、校門の前で呼びかけていたくらいです。
- 体育祭が中止になりかけるなんて、陰即の影響力はすごいですね。
- 笠原： 中には、自分が早く帰って買い物をする時に「今日は私、陰即するんだ！」と楽しく使ったりもしていましたね。
- 校内の流行語として広く使われていたんですね。

生徒の印象は？

— 今の光陵生のイメージをお聞きしたいと思います。色ですとか、一言でも良いのでお答えいただくとしたらどう表現されますか。茅野先生、いかがでしょう？

茅野： こういう仕事をしていると、学校全体で色づけするようなことができなくなってしまうんですよね。でも、あえて言うのであれば、やはり「真面目」ですよ。もちろん個性はありますよ。

— 意外と先生方の中では、「この学校はこういうイメージ」というものはなくなっていくものなんですか？

茅野： いや、あることはあります。ただ、一人一人の顔が思い浮かんでくるものですよ。もちろん真面目じゃない生徒とかね。

— 先生ならではですね。では、教師として学校に戻って来たときに、思わずしてしまったことは何かありますか。また実際に生徒と過ごしてみようと思うことがあればぜひ教えてください。

茅野： そうですね。最初の1ヶ月ぐらいは、「懐かしいな」と校内をウロウロしてしまいました。

大竹： 変わっていることは多いですよ。体育祭の練習なんてありませんでしたし、「もうまったく違う人種？」なのかと思いましたね(笑)でも、制服を見ると、やっぱり腕には懐かしい蛇腹があります。

茅野： 街中で蛇腹のついた制服を見ると、「光陵生だ！」って思いますよね。

大竹： 学ランを見るとついつい腕を見ちゃいますね(笑)

— わかります。もう無意識に見てしまいますね。

茅野： 実際に生徒と話してみてもですが、とても人当たりが良いですよ。

林： そうですね。現在の生徒は明るくて、素直だと感じます。ですから、社会に出て嫌な思いをしなければいいなとちょっとドキドキしてしまいます。教師としての立場だと、自分たちの時よりは今の生徒の方が接しやすいのかなとは思いますが。

— 生徒の印象は昔と変わったのですね。

林： 良いか悪いかは別だとは思いますが、ただ、全体の印象からすると明るい生徒が増えたなと感じます。ニコニコしていますし、挨拶をよくするようにもなりましたね。

— 本郷先生もご到着されたので、ぜひ本郷先生からも今の光陵生の印象をお願いします。

本郷： 私も自分たちの頃よりも挨拶をしっかりとするようになったように感じますね。

— そうなんですね。特に意識してやっていたことではないと思うのですが…

本郷： 個人的に感じているというだけなのかもしれませんが、自分自身が来客に向けて意識して挨拶をしていた記憶はないんですよ。でも、今の生徒たちは来客の方々にとしっかりと挨拶をしますよね。

— 本郷先生の光陵生だった頃の思い出は何かありますか。

本郷： 自分は13期だったので、今の校舎ができて10年目くらいの頃に入学した世代です。つまり当時の光陵というのは、近隣の希望ヶ丘や平沼といった伝統校と比べると本当に新しい学校でした。光陵にはこれから歴史を作るという勢いのある高校だということを聞いていて、入ってみたいと感じる高校でした。家から近かったというのも決め手でしたけれど。

— 光陵を新しい高校という意識で見たことはなかったのですが、確かにそうですね。学校生活で印象的だった思い出はありますか？

本郷： 私はソフトテニス部だったのですが、実は入学当初はなかったんですよ。ひとつ上の同じ中学の先輩から「新しい同好会作るからお前も入れ！」と言われたのがきっかけで入りました。新しい部活を作り、生徒会もやっていたので、中学生の時に比べて積極的な高校生活だったと思いますね。

- 当時は硬式テニス部しかなかったのですね。
- 本郷： そうですね。硬式テニス部のコートはすごく綺麗でしたね。
- 笠原： 当時、硬式野球部もなかったですよ。野球部は長い間軟式でした。当時の生徒総会では硬式にすることが決まったけれど、職員会議でダメだったと雑誌光陵に書かれていました。
- 本郷： グラウンドの問題もありましたからね。
- 林先生は先ほどハンドボール部だったとおっしゃっていましたが、何か印象に残っている思い出はありますか。私もハンドボール部でした。
- 林： そうですね。週に2回は定休日がありましたが、毎日、よく続いたなと思いますね。
- 当時のハンドボール部は強かったですか？
- 林： これが結構強かったんですよ。県大会とかでは準々決勝まで勝ち進み、1点差で負けるくらいの惜しい試合をしていました。
- 最近では、42期が強かったんですよ。ポジションはどちらでしたか？
- 林： サイドでした。
- 私もです！

山手分校から権太坂の校舎へ

- 先ほど、テニスコートがとても綺麗だったというお話がありましたが、校舎について何か思い出はありますか？
- 茅野： 僕が入学した前年に今の権太坂の校舎が完成をしました。当時はまだ2棟が完全にはでき上がってなかったけれど、思い出深いのは勉強とか授業ではなく、校舎ですね。1年生のときに、まだ校舎ができておらず、生物室や実験室が今のテニスコートのところにプレハブとしてありました。当時の授業で突然、「今日はミズの解剖をするよ」と言われて驚きました。ミズはどうするかを聞いたら、近くにある堆肥をほじって来いと言われたんですよ。
- テニスコートの辺りで実験に使えるようなミズなんていたんですか！？
- 茅野： そう思うよね。でもここは昔、横浜国大の農業教育過程の実習工場だったんですね。農場だったんです。堆肥をほじってみたら、大きいミズが出るわ、出るわ…。ミズをお皿にとってきて、ピンセットとハサミでちよきちよき…として、蠕動(ぜんどう)運動を観察しました。
- うえ…ちょっと私たちが耐えられるか自信ないです…。校舎ができたあとはいかがでしたか？
- 茅野： やはり、新しい校舎だったので、「こんなに綺麗な校舎を大事にしなくては」という意識が強かったですね。先生に言われる前に、生徒たちで自主的に掃除していましたよ。
- 生徒が自主的にですか！？
- 茅野： そうですね。山手分校のときに校舎は木造でぼろぼろでしたからね。見回りに来るのも先生じゃなく、美化委員の先輩でしたね。恐かったですよ。ふざけていると怒られましたし、でも結構必死に掃除はしていましたね。帰りのホームルームはなかったけれど、最後の授業が終わるとみんな一生懸命掃除してから帰るくらい、とにかく掃除好きでした。大掃除のときは裸足になって、みんなでワックスがけまでやっていましたよ。ウオッシャーなんてなかったの、みんなゴシゴシとやっていましたね。
- 茅野先生の美化委員のお話といい、先ほどの大竹先生がおっしゃっていた出版委員といい、委員会活動が活発だったんですか？
- 茅野： そうですね。今は教師がああしろ、こうしろといういろいろな言うけれど、当時は委員長が先頭になって指示をしていたんですよ。美化委員長はゴミ箱を持って立っていたりして。

- 生徒が自主的にいろいろやっていたんですね。
- 茅野： すべて生徒が自主的に…ということはないと思いますが、少なくとも先生が言うことはなかったと思います。
- 本郷： 生徒総会も先生はシャットアウトといった感じでやっていましたね。
- 大竹： 僕は覚えていないけれど、当時「先生は出てけ！」と言ったらしいです。僕は覚えていないけれどね(笑)
- 本郷： でも、生徒総会なんだから、先生はいらないって雰囲気は強かったですね。
- 大竹： 当時の生徒の自主性については、出版委員が記事にもしててね。「挨拶振興会をつくった。学校とは本来楽しいものであり、それは自分たちが自主的・主体的に作り上げるという基本スタンスを忘れた僕たちが、原点に戻って考え直そうと思い、仲間を集めて作った会であった…」、てね。当時はやっぱり生徒だけで、すごいことをしていたと思います。
- すごいですね。記事にもなって残っているんですね。
- 大竹： 他にも合宿討論会というものも作って、夏休みに学校へ泊まり込んで、一晩中、「光陵はどうあるべきか」といったことを話し合う…なんてこともしていたね。やっぱり記事にもなっていますね。
- 今の光陵生には考えられないですね。
- 大竹： 僕は今の光陵生には、「変えていきたい」というパワーが足りないと思っています。前のものを踏襲するだけで、ぶち壊してまで新しい何かを作るという勢いが無いと思います。踏襲することを否定する訳ではないですよ。それはそれで偉いと思っています。確かに僕らの世代は伝統というものはないかもしれないけれども、自分たちのやりたいことをやるのが光陵生だった。当時は結構怒られたと思っていたけれど、今になれば本当に怒られていたのか疑問に思うこともあるんです。
- 私たちには確かに何かを変えようというような気概はなかったと思います。型破りなことを何かしたということもなかったです。このようなお話をお聞きすると、いい子でいたんだな…と思います。冷たい目で見られるとか、他人の目を気にしていたと思います。
- 大竹： 今の世の中がそうなんだと思います。光陵生だけがそういうことをやっていたら、またおかしくなっちゃうかもしれませんね。僕らの時代は学生運動も活発だったし、「大学に行ったら、やっぱり石を投げるのかな…」なんて思っていましたよ。閉塞感のようなものを感じていたんだと思います。当時の高校生というのはそういうのが許される身分だと思っていましたしね。

最後に光陵や光陵生にメッセージを！

- そろそろお時間も迫ってきましたので、最後にこれからの光陵や光陵生にメッセージをお願いします。一言ずつで構いません。
- 大竹： 一言？(笑)じゃあ、大志を持って！
- いただきました！ありがとうございます。
- 茅野： 似たようなことになってしまいますが、やっぱりもっと欲を出してほしいと思いますね。勉強だけでなく、部活動などすべてにおいてもね。
- 林： 私はもっと視野を広げてほしいですね。世の中にはいろいろなものがあるんだということに気づいてもらえたならば、何か新しいことがはじまるかもしれないと思っています。
- 笠原： 私はちょっと違う他人も認められるようになってほしいと思います。というのは、今の体育祭というのは全員参加で、ちょっとでもズレると点数が下がってしまうなんてことがありますよね。
- 大竹： 一糸乱れずってやつね。
- 笠原： 時代的な同調圧力というのか…例えば、赤組拍子とか白組拍子とか言っているのに、同じ調

子で「オーレ！」と言っていたりします。同じような規定演技で全員一糸乱れず…ということをやっていると、それに付いていけない人は休むしかなくなりますよね。男子はみんなスポーツマンで爽やかでいて、女子はみんな小綺麗にしている…という感じがするんです。ちょっと違う人がいても良い。光陵がそういう人に生きにくいよう、違う人を認める風潮がもっとほしいなと思っています。

— では、締めということで、本郷先生、お願いします。

本郷： 先日、修学旅行に同行したんですけど、みんな本当にしっかりしています。でも、文化祭とかを見ていると、「ここらへんでいいかな…」という妥協点を勝手に作って、自ら止まってしまっているように感じるんです。茅野先生のメッセージとも重なってしまっていますが、もう少し、もう一歩上を目指してほしい。可能性を狭めずに、いろいろ挑戦をしてほしいと思っています。

— 皆さん、素敵なお言葉ありがとうございます。本日はお忙しいところ、お時間をいただき誠にありがとうございました。

光陵の卒業生だからこそ感じる、今の光陵生との違い…そして先輩として、教師として光陵生や光陵を語っていただき、私たちも大変興味深くお聞きしました。光陵高校も来年 50 周年を迎えます。

ぜひ、皆さんも懐かしい高校時代のアルバムを開いて、あの頃の記憶を思い出してみてはいかがでしょうか。